

日本職業教育学会

ニューズレター

第3号 (2025年7月)

目次

1. 大会予告：日本職業教育学会第6回大会	p. 1
2. 部会報告	
1) 中国・四国地区部会活動報告	p. 5
3. 図書紹介：	p. 6
1) 長谷川雅康編著「1970年代以降の高等学校工業科の実習」	p. 9
2) 木村元編著「学校の戦後史」(新版)	p. 10
4. イベント案内	p. 11
5. 学会ニュース：事務局よりお知らせとお願い	【以下非掲載】 p. 12
6. 編集後記	p. 13

日本職業教育学会 第6回 (通算66回) 大会予告

1. 開催日

2025年10月3日 (金) ~5日 (日)

2. 会場

YIC 情報ビジネス専門学校

〒754-0021 山口県山口市小郡黄金町 2-24

最寄り駅：JR 新山口駅 徒歩5分

※会場周辺には飲食店・コンビニ等の施設は限られております、昼食は事前にご準備いただくと安心です。

※車で来場される場合、会場には駐車場スペースがありませんので、近隣の有料駐車場をご利用ください。

※対面開催のみ。オンラインでの配信は予定していません。

3. 大会概要

10月3日 (金) 午後

14:00~16:30 見学会 (詳細調整中)

17:00~19:00 懇親会 (場所：山口グランドホテル JR 新山口駅前)

10月4日 (土)

午前

10:00~11:30 部会

若手研究者部会

専修学校部会

12:00~12:45 新旧合同理事会午後

13:00~16:00 シンポジウム

16:15~17:30 総会

10月5日 (日)

午前

9:30~12:30 (予定) 自由研究発表

午後

13:30~15:00 中国四国部会

4. 宿泊先

大会事務局では宿泊の手配はいたしません。

会場周辺 (新山口駅周辺) にはビジネスホテル等がありますが数が限られていますので、各自で早めのご手配をお願いいたします。

5. シンポジウム

テーマ：「学校における技術・職業教育の意義再考—高校工業教育を中心に」

概要：現在のシンポジウム委員会体制最後のシンポジウムは、学校における技術・職業教育をテーマとしました。学校における技術・職業教育としては、小学校工作教育、中学校技術・

家庭科教育、高等学校職業教育などが考えられます。今回は、全国的にみて縮小傾向にある高校職業教育、とりわけ工業教育に焦点をあてることとしました。報告予定者と報告をお願いするにあたって依頼したテーマは、以下のとおりとなっております。報告の詳細等は大会プログラム等をご覧ください。

シンポジスト：

- 井上真求（京都女子大学）：高校職業教育の動向について
- 辰巳育男（前・東京工業大学附属科学技術高校、現・大阪工業大学）：高校工業教育の実践と意義について：
- [選定中]：（大会開催県・山口県の高校工業教育の動向と実践について）
- 岡村慎一（学校法人 YIC 学院）：高校職業教育・工業教育への期待・課題

司会：

- 横尾恒隆（横浜国立大学名誉教授）
- 佐野正彦（大阪電気通信大学）

※本シンポジウムは非会員にも無料公開されます。

6. 部会の開催概要

若手研究者部会（4日午前中）

話題提供：段順然（京都府立大学大学院）「専門職大学における理学療法士養成について」

概要：今日、社会構造・産業構造の変化により、より多くの人々が福祉サービスを必要とするとともに、医療の高度化によって、高い専門性を持つ、医療・福祉職養成のニーズが高まっている。そのような中で、従来の専門学校・大学とは異なる専門職大学が果たしている役割について、話題提供を踏まえて、議論を行いたい。

※本部会は若手研究者の交流も目的としているので、参加者に研究紹介をお願いする予定です。

専修学校部会（4日午前中）

テーマ：専修学校制度制定50周年について

発表者：学校法人 西野学園 前鼻 英蔵

概要：専修学校制度が制定されて50年が経った今日、この間の社会の在り方、学び方が大きく変わってきた。これまでの専修学校の歴史的動きに関しては以前、この部会で全専各連の菊田会員（当時）から報告があった通りである。

今回は、知事部局による専修学校学校認可と文部科学大臣所管の認可基準の違いの他、医療系における同一資格学科認可基準に大学と専修学校での相違点など、その解消に向けての議論はこれまでもない。今回は次なる専修学校制度に向かい、議論となるべく論点の整理と方向性についての議論を報告したい。

中国四国地区部会（5日午後）

テーマ：人を育てる カウンセリング・マインド

～ 働く人の「やる気」を高め、活力ある職場づくりをする方法

企画者：片山勝己（マツダ(株)勤務、放送大学学生）

登壇者：河野善四郎さま（学会外ゲスト、アジアユーラシア総合研究所・常務理事）

河野さまは、銀座ジュエリーマキの運営会社(株)三貴の副社長退任後、産業カウンセラー一等の資格取得し、上記テーマ関連の支援会社「ぜんと」を立ち上げられました。両社で

の経験を踏まえお話しをしていただきます。

7. 今後のスケジュール

- 自由発表申し込み受付：6月26日（木）～7月31日（木）24時（Web ページで申し込み受付中）
- 大会参加申し込み受付：8月中旬～9月末（予定）
- 予稿提出期限：9月中旬（予定）

※各種申し込みは大会 Web ページにて順次案内予定：

- 自由研究発表申し込み：

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf19XEW1VHbxC5vSrbnnhvhqsh4kkBtgVpp8xwdz7E2Ysa7g/viewform>

- 予稿提出フォーム：
（フォーム開設までお待ちください）
 - 大会参加申し込み：
（フォーム開設までお待ちください）
-

8. 参加費・懇親会費

参加費

区分	会員	非会員
一般	2,000 円	3,000 円
学生・院生	1,000 円	1,000 円

懇親会費

一般（会員）	3,000 円
学生・院生（会員・非会員）	2,000 円
一般（非会員）	6,000 円

大会実行委員会

岡本慎一（学校法人 YIC 学院）

瀧本知加（京都府立大学：事務局長）

藤田駿介（流通経済大学）

問い合わせ先：jimukyoku.jsstvet22@gmail.com

(部会報告)

中国・四国地区部会 活動報告 (2025 年 1 月- 6 月)

片山 勝己 (マツダ(株)勤務・放送大学学部生)

1. はじめに

本学会ニューズレター第 2 号(2025 年 3 月発行)報告分以降の標記期間の中国・四国地区部会の活動報告をする。この間に表 1 の No59 に示すオンライン・サロンを一回のみ行った(事務局片山の個人事情(病気・勤務先休業)が低開催回数の理由である)。登壇者は北原美知瑠(きたはらみちる)さんだ。

北原さんは本学の会員でも、職業教育学の研究者でもない。本学会の研究対象のひとつである職業人・実務家のお一人だ。学習塾・絵画教室を主宰されている個人事業主だ。主婦、お母さんでもある。同時に放送大学で社会人学生として学ばれている。

放送大学は教養学部だけからなる単科大学である。だが、成人のリカレント教育も重点を置いており、放送大学での学びを職業教育的に活用されている方も多し。そこで、片山から特にお願ひし、「放送大学と職業教育」とのメインタイトルで、北原さんには今までに 4 回ほど、ゲストスピーカーとしてご登壇いただいた。

本稿では、北原さんにこのご登壇経験を通じ、どのように学び・気付かれたのかを寄稿いただいた。本学会と市民の連携強化、シチズン・サイエンスの貴重参考資料になると考え、本ニューズレターにて報告する。

表 1. 北原美知瑠さんの中国・四国地区部会 オンライン・サロン登壇歴

回	開催日	土	ゲストスピーチ タイトル	学会HP	参加人
32	2023/7/22	土	放送大学と 職業教育 北原美知瑠さんの場合	https://jsstvet.org/?p=3647	9
48	2024/3/16	土	放送大学と 職業教育 前半 ～卒研発表の再現 AI翻訳の比較から見る日英言語文化の相違	https://jsstvet.org/?p=4031	11
49	2024/3/30	土	北原美知瑠さんの場合 その2 後半 ～私は放送大学・卒研を今後こう活かしたい	https://jsstvet.org/?p=4031	10
59	2025/2/22	土	これからは「学習歴」の時代 ～放送大学と私の、ゆるくも不思議な関係	https://jsstvet.org/activity/%e9%97%a5%e6%9c%ac%e8%81%b7%e6%9c%9c	5

2. 北原美知瑠さんご寄稿： 職業教育学会のオンライン・サロンに登壇して

(1) ご挨拶と自己紹介

私、北原美知瑠は、2020 年 2 学期 (10 月) に放送大学の学部、選科履修生として入学した。現在は、同学の修士課程選科履修生として学び続けている。2020 年度の入学は、一度 2003 年度に「社会と経済」専攻を卒業しての再入学だった。放送大学卒業後、大卒資格を活かして再就職し、経済的に苦しい時にも乗り切ることが出来た。家事・育児、そして仕事にと多忙な日々を送っていたのだが、新型コロナウイルスのパンデミックが起き、仕事が減った。代わりに、放送大学の単位認定試験が、自宅受験のオンライン形式に切り替わったと知人から聞き、それならこの間にもう一度勉強できるかもしれない、と、興味のある科目のみ在籍しようと思ったのがきっかけだった。再入学後、放送大学

の学生同士が交流できる SNS があると知り、その投稿の中で、貴学会 中国四国部会のサロンで「放送大学と職業をテーマとして体験談を募集している」との片山さんの記事を読んだ。体験ならば語れるかもしれない、と手を挙げた。放送大学で学士を取ったことにより、何とか道を切り開いてきたので、その恩返しのためだった。そして、もし在学生在で困っている人がいたとしたら、その背中を押せたら、とも考えた。

放送大学には、一年だけ在籍するつもりだったのに、一年経ったらまた興味深い科目が出てきて辞められず、より学費がかからない全科履修生に入り直した。そのうちコロナ禍が明けて仕事の忙しさが戻ってきたが、そのままの勢いで卒業論文を執筆し、2023年度に「人間と文化コース」を卒業した。放送大学の SNS 学生交流サイトの投稿を読んでいると、修士に在籍または修了した人の記事を見ることもあり、今までは考えていなかった「修士」という世界に興味を持った。もしかしたら、自分も修士になれるかもしれないという欲を持つようになった。その延長で、今は修士課程選科履修生として、人文学プログラムを中心に学んでいる。

片山さんのサロンでは、「放送大学と職業研究 北原美知瑠の場合」と題して、放送大学を卒業してから、学士の学歴を活かして学習塾に講師として勤務したこと、その後も英会話学校の校長として、学校事務や通訳・翻訳をし、その後、また別の学習塾に転職し、英語専任講師としてキャリアを伸ばしたことなどを話した。現在は転居を折に独立して、個人で学習塾を開いている。英語教育に従事して、今年で17年を迎える。

そして、学習塾業の他に力を注いでいる仕事である、絵画教室の運営についても語らせていただいた。学習塾に勤務する以前から、主にパステルで絵を描いていた。個展を開くと、その絵の描き方について聴かれることが多く、自身のパステル画教室を開いた。昼間は絵画講師として、夕方から夜にかけては塾講師として働いた。絵の描き方を伝授し、希望する人には販売しているうち、美術の公募展に出すと、受賞4回、入選12回の評価を得るようになり、絵画教室の主宰歴が20年を越し、今に至っている。今後、芸術の道を究めるか、それとも学習塾講師として、語学や教育学をもっと深く研究する道に入るかの選択に悩んでいる。

片山さんのサロンでは、他の方々には話を聴いていただくことで、自分を客観的に見つめ、ご意見を伺い、次の展望を得たいという目的があった。片山さんを始めとするサロンの方々には、貴重なアドバイスをいただき、本当に感謝している。

(2) 放送大学と職業教育

放送大学では、例えば認定心理士などの様々な資格が取得できるが、短大を卒業した後、独学で英語を勉強してきた私にとっては、学士の資格が再就職に際して役に立った。

また、放送大学で学んだ内容そのものにも、私は刺激を受け続けている。この記事を読まれている方々にとっては、学部や大学院の修士課程で学んでいることは、学術的な世界の初歩段階にすぎないかもしれない。けれど、そのような世界を知らず、実務を担ってきた私には、学術的な視点は今までになかった。どのような書籍を「専門書」と呼ぶのかも分からなかった。放送大学で卒業論文を執筆するに当たり、専門書の存在を教員から教えていただいたから、より専門性の高い書籍を購入して読むようになった。

今までにやってきた仕事は、絵画も学習塾講師も、どちらも人に説明することが多い。例えば絵の指導を例に取れば、お客様の作品をどうしたらもっと魅力的なものになるのかを想像し、アドバイスをを行う。希望があれば、手を入れさせていただく。モチーフを観察し、形を取り、光と陰（影）を想像し、グラデーションを付け、立体的に見えるように工夫を凝らす。また、お客様が何を描くか、何を描きたいか、そこから何を読み取るか、といった心理的な側面も考慮しながら、声の掛け方に配慮する。その結果、お客様にも変化が見られる。明るい声と明るい言葉で接すると、それを受けたお客様の反応も明るく、ポジティブになる。季節を感じ、やわらかい色を乗せていくと、心も穏やかになっていく。このように、「学術」というより、色彩や画法、描画技術や想像力、そして言葉の力を駆

使してコミュニケーションを取り、実技の世界に徹してきた。学習塾講師として勉強を教える時も、相手の気持ちに配慮しながら言葉を選ぶ。ポジティブな言葉で相手を褒めればお互いに嬉しくなって、若葉が光の方向へ自然に伸びていくように、人は、伸びていく。どう言えば相手にとって分かりやすいか、という点は、二つの仕事に共通している。人と人との間で磨き、磨かれ、人の成長を見守るこの仕事に、私は生きがいを感じている。そして、その中に、自分自身の成長もある。仕事に欠かすことのできない他人への説明の仕方を、放送大学の授業を通して学ばせていただいている。

(3) 今後の展望と謝辞

まずは、今来てくださっている人たちの力になれるよう、地域の子供たちの学力向上に貢献したい。英語力は職業に結びつきやすく、今までも、学生の方々を志望校合格へと導いてきた。また、「英語力を伸ばしたい」と言う大人の気持ちにも寄り添っている。外国人と英語で会話をしたい、英語の資格を取得し、今後、英語に関わる仕事に就きたい、など様々な夢の実現に向けて、英語を指導している。私の教室で培った芸術力や英語力で、地域の人々がより心豊かに生活を楽しめるよう、また、やりがいのある仕事に就けるよう、これからも応援を続けたい。

さて、仕事ばかりでは他人のサポートばかりで、時々「これで良いのか」と立ち止まる時がある。私自身については、仕事と家事などの雑多な生活に追われて、なかなか自分のやりたいことをする時間が取れない。もし、自分の夢を叶えるための時間があるとしたら、以下のように考えている。

一番は、描いてきた絵をまとめて画集を作りたい。絵を教えながら、たくさんの人たちと一緒に描いてきた思い出などのエピソードも文にして整理する。絵は抽象だから、作家の言葉が添えられていないと、その作品で何を言いたいのかが分からない。画集は、絵をまとめるとともに、その絵に新たなタイトルと意味を付ける作業である。私にしかできないことをやりたい。

二番は、放送大学で執筆した卒業論文よりも、高度で多角的な視点を持ち、また、もっと思考を深めた論文を書いてみたい。今まで英語を教えてきた経験も踏まえ、生成AIやAI翻訳登場後の英語教育がどうあるべきかという未来のビジョンを考察したいと考えている。

このように、片山さんのサロンを通して、これまでしてきた仕事を発表させていただいた。「仕事」という切り口だけのようなではあるが、半生を振り返る機会になった。深く感謝を申し上げたい。

最後に、拙作を一点、ご参考までに紹介させていただく。

この作品は、夏の海を想像して描いた。灯台は、行く先を照らす道しるべだ。はるかなる海の向こうから、こちらへやってくるのか、それともこちらから異国へと向かっていくのかは、ご想像にお任せする。海に佇むと、自分の存在も悩みも小さなものに思われる。見知らぬ異国へ、未来への夢を乗せて、青い空と青い海を描けば、これからも前へ進んでいこうという気持ちになれるような気がしている。



図1. 「しおさいの詩」(パステル)
第96回 日本パステル画会展入選作 (2020年)

3. 田中卓也会員のコメント (25/2/22 サロン、司会者)

まずは2025年2月20日(火)に中国・四国地区部会の活動報告を行ってくださったゲストスピーカーの北原美知瑠さんのご発表に敬意を表したい。北原さんは本学会員、職業教育学研究者ではなく、実務家の一人である。現在は学習塾や絵画教室を主宰されている。主婦として家計を支えながら母として子育てにも余念なく、放送大学の社会人学生として現在も積極的に学ばれている。

執筆者は北原さんのご発表について関心を持って聞かせていただいた。それは放送大学での学びもさることながら学歴、学習歴についてであった。学歴とか学閥とか、コネとは一体どのようなものな

のか、これまでも多くの議論があった。執筆者は教育史研究者の端くれの一人として再度学歴や学習歴を真剣に考えてみる機会をいただいた気がしている。修士論文で、グンゼの女工（女子従業員）の教育の歴史についてみていた時に女工の学習歴に関心を持ったことを思い出した。女工の学歴をみると高等小学校卒業の方が多く、そのまま工場に就職、工場内女学校で基礎教養を身につけて、女工を退いてからは一般家庭の花嫁、婦人会会長、民生委員、大学講師などになる者が多数を占めた。さらに女工の学習歴は、高等小学校卒業でありながらも、ひとりの女性として生きるために必要な教養を身につけていったことは個々によって事情は異なるが、紛れもない事実である。

北原さんが配布されたレジュメで、

放送大学で学んだ内容そのものにも、私は刺激を受け続けている。学部や大学院の修士課程で学んでいることは、学術的な世界の初歩段階にすぎないかもしれない。けれど、そのような世界を知らず、実務を担ってきた私には、学術的な視点は今までになかった。どのような書籍を『専門書』と呼ぶのかも分からなかった。放送大学で卒業論文を執筆するに当たり、専門書の存在を教員から教えていただいてから、より専門性の高い書籍を購入して読むようになった

と記述されていた。大学院での学びは、まずは修士論文を頂点にし、さまざまな学びを経ながら完成に至る。学術的な視点を持っていなかったことの自戒をととともにそのことを公表し、専門書の購読の手ほどきから受けた北原さんは、大学院入学への学びの一步を踏み出したのであろう。しかしながら大学院でさらなる学びを追求する姿勢や、主婦であり、母であり学習塾や絵画教室の主宰者として、さまざまなこれまでの経験で培ったことは高い教養を身につけ、さらなる学びを深化させるにはとても重要なものである。放送大学の社会人学生として現在勤勉しながら、ぜひ大学院生としてさらなる一步を踏み出していきたいと考える。

4. おわりに

本報告書の筆者は当部会事務局片山である。だが、紙面の8割は北原さんと田中会員によるものだ。先ずもってお二人にこの点をお礼申し上げたい。読者の皆さんはこんな紙面構成をどう思われただろうか？私はこれを「学会と一般市民の連携強化」の始まり・兆しだと解釈したい。市民とアカデミア（プロ研究者）がともに社会課題に取り組むシチズン・サイエンス的な活動だと言ってもいい。そして、その仲人役を今回片山がした…と自画自賛している。

本学会は2025年5月15日に「日本学術会議法案についての声明」を発出している。これは、日本学術会議のあり方を変更しようとしている政府法案に対し、反対の立場を表明している日本学術会議に賛同するものだ。日本学術会議が政府から金銭的な支援を受けつつも、政府影響を排除して活動することはとても大切である。「学問の自治」の基盤だと言える。

だが、こうした意見を学术界から政府や国会に伝えると同時に、一般市民に分かりやすく説明する努力も各学会はするべきだ。そのためには学会と市民の連携が不可欠だ。学会大会等に参加して、「なんかよく分からなかったけど、いいことをしている。学会を応援したくなった」と言ってくれる一般市民が一人でも増えることが大切だ。その一助になるよう本部会サロンを継続していきたい。

以上

(図書紹介)

長谷川雅康編著

「1970年代以降の高等学校工業科の実習 一制度の実態・担当教員養成―」

山田 宏

1978年高等学校学習指導要領改訂では、工業科の目標として「中堅の技術者に必要な知識と技術を習得させ」と「工業技術の科学的根拠を理解させ」が削除され、原則履修の共通基礎科目として「工業基礎」と「工業数理」が導入される一方で、その他の工業科目が削減され、その教育内容も絞り込まれ、さらに専門教科の必修単位数も削減されることになり、高校工業教育における専門性の希薄化が懸念されることになる。こうした動きは既に70年改訂にも教育課程編成の弾力化として部分的に現れており、73年に設置された理科教育及び産業教育審議会の職業教育の改善に関する委員会によって方向づけがなされたものである。同年に東京工業大学附属工業高校に赴任された編著者の長谷川氏もおそらくはこうした動きに懸念を持たれていたのであろうが、議論の前提として工業科の教育課程、特にその中核と言ってもよい実習の実態の把握が必要であるとして、協力者とともに70年改訂学習指導要領に基づく教育課程の実施状況についての全国的な調査を76年に開始されたことが本書の発端となっている。調査はその後、学習指導要領の改訂毎に87年、96年、2005年、15年と実施され、その結果は東工大附属高校の『研究報告』や科学研究費補助金の報告書として公表されていたものの、その入手は必ずしも容易でなかった（現在では鹿児島大学リポジトリから入手可能となっている。）が、今回、これまでの報告書を再構成する形で本書が出版されたものである。

本書の中心となる内容は工業科の教育課程における実習の単位数やその内容の変遷（第2章）であるが、高校工業教育の歴史とそこでの実習の位置付け（第1章）、実習の具体的内容についての事例研究（第3章）、実験・実習担当教員の養成（第4章）、卒業生による工業教育に対する評価（第5章）等も含まれている。但し、紙面の制約から第2章の内容についてのみ簡単に紹介することとする。

第2章では計5回の調査結果に基づき、機械、電気、電子、建築、土木、化学、情報技術、電子機械の各科・系における実習及び共通科目である工業（技術）基礎について、その実施単位数と実施内容の変遷が整理・分析されるとともに、その特徴や問題点が検討されている。そこで得られた知見のいくつかを挙げれば、機械科・系では、実習と比べて実験の減少が大きく、座学における理論の基礎の学習を裏付ける事象の定量的な扱いを危うくしている。実習では手仕上、切削加工（旋盤）、溶接の実施率はほぼ維持されているが、切削加工（平面加工、特殊機械加工等）、塑性加工（鍛造、板金、転造）等では半減している。電気科における実験・実習のテーマは、コンピュータによる制御、ソフトウェア技術、電気・電子工作等は増加傾向、電気工学や電子工学の基礎に関するものは減少傾向、電気機器や電力関係にはあまり変化が見られない。工業（技術）基礎について学習指導要領は同一内容を学科の別なく実施するとしているが、その具体的状況を①各学科共通内容で実施、②一部を共通内容で実施し、残りを学科別に独自の内容で実施、③各学科別に実施に分けてみると、導入当初（87年調査）はそれぞれ41.9%、18.9%、39.2%であったものが、改訂毎に①と②の比率が低下し、③の比率が上昇し、2005年調査ではそれぞれ4.5%、4.5%、91.0%となっている。その多くは従来の実習の基礎的内容にあてられているが、実習内容への影響は学科によって異なっている。

その他にも興味深い知見が得られているが、それは本書を読んでいただくことにして、加えて本書には5回の調査で得られた実習の実施内容に関するデータが82ページに渡り付表として収められており、これを元に読者が新たな分析を試みることに期待したい。最後に編著者のあとがきから、「生徒が社会に出てから行おう実務に関する知識・技能・技術に関する見方などを真摯に教授している専門高校は視野に入りにくい状況にある。／世の中が真の専門性を尊重するのはいつの日であろうか。・・・それが実行されれば、確かな世の中が到来するとねがうばかりである。」

(学文社、2024年、A5版468頁、9,900円税込)

(図書紹介)

木村 元著 (編)
「学校の戦後史」 (新版)

田中 卓也 (育英大学)

本書 (新版) は、戦後 80 年を迎え、学校と社会を描いた関係史である。同書の帯には、「戦後 80 年—人類史上大変動のなかで、学校はどこへ向かうのか?」が記されており、「平等を軸とした権利としての教育と機会均等をもとに出発した戦後の学校。どの層も大きく動揺しており、いずれも自明ではなくなってきた」とふれている。教育の状況が目まぐるしく変わる時期に、学校の役割を問うことに挑戦している。「序章 就学・進学動向からみる戦後—学校の受容と定着」では、戦後の子どもらは、「当たり前のこと」として、学校に入学・卒業する。また学校を教師と子どもの「生きられる場」に変えていくことが必要であった。戦後の学校は、子どもらが普通に通学すること、さらに中学校、高等学校、大学を経て社会人になっていく進学率拡大路線が敷かれた。同時期にはベビーブームと重複し、子どもらが学校化社会に組み込まれた。高度経済成長期を迎え、登校拒否や不登校にみられる社会病的な子どもを生みだした。学校卒業→社会人という路線下で、子どもらは学校に普通に通うことよりも、学校に適應できるかが問われるようになった。「第1章 『日本の学校の成立』—近代学校の導入と展開—」では、明治期に「学制」を公布し、小学校を軸とした近代学校制度を整備した。師範学校の創設と教員養成、国民皆学をめざし児童の入学の義務化、学級の誕生、学校行事の提示、教員文化の胎生等も見られた。やがて義務教育を定着させ、教育勅語の渙発を機に、児童生徒をコントロールのもと天皇制国家基盤を確立した。多くの対外戦争を経験し、子どもたちを戦場に送り出した。戦時下の学校では、人間形成よりもむしろ身体的訓育実践が施されていたのである。「第二章 新学制の出発—戦後から高度成長前」では日本国憲法と教育基本法の理念に基づき、新学制により戦後社会の新たな学校の枠組みが示された。新制中学校、高等学校、定時制課程の設置や夜間中学の出現等はその典型であり、敗戦後の日本の教育・学校の民主化がすすめられた。「第三章 学校化社会の成立と展開—経済成長かの学校」では高度経済成長下に学校が経済発展を担う人材養成の場として定着した。高校は大衆化され、産業化社会への対応が求められた。1968年版学習指導要領の「教育内容の現代化」は、天野貞祐文部大臣提示の「期待される人間像」へつながり、学校が子どもらの進学先の受験競争社会と化した。

「第四章 学校の基盤の動揺—ポスト経済成長の四半世紀」では、1970年代以降、学校はますます学びの場として現実味を帯びはじめ、脱学校論への共感も同時に広まった。90年代になるとオルタナティブな学校に変化を遂げ、新たな人間形成の場へと進むことになった。不登校の児童生徒のためのフリースクールの登場、海外移民の増大に伴う多文化共生教育の開始、さらにはキャリア教育や公共性への教育が注目され、他の社会と教育の連関が求められた。「第五章 問われる公教育の役割—この10年の動向を軸に」では、学校を取り巻く環境が劇的に変化するようになり、戦後の学制の見直し、公教育や義務教育の再設定の問題が浮上し始めた。また子どもらの教育の平等が前提にあった戦後の学校が、子どもや家族の学校選択が重視され、彼らのニーズに応える動きがみられた。令和に入るとコロナウイルスの災禍が教育のオンライン環境の整備に、少子化の波が学校の統廃合問題を加速させた。人工知能 (AI) の急速な展開は、情報技術を学校で学ぶ意義に変化を齎そうとする。学校は今世紀最大の揺らぎを見せている。終章「学校の世紀を経て」では、学校の役割を再確認しながら、学校の戦後史を人間形成の歴史の中にまとめている。現代の日本の学校は近代学校、日本の学校、戦後の学校の三層の上に成立しているものとし、各層が揺らいだことが学校の動揺を引き起こしたと論じている。改めて戦後 80 年を経た日本において、学校はどこへ向かおうとしているのかを再確認するためにはふさわしい良書であるといえよう。

(岩波新書、2025年、240ページ、新版、1100円税込み)

5. イベント案内

①アジア職業教育訓練学会大会 (2025) のお知らせ

2025年11月22日(土)と23日(日)に、筑波大学でAASVET(アジア職業教育訓練学会)の2025年度大会を開催します。

今回は“Exploring the Asian Model of Technical and Vocational Education: A perspective on labor market, culture, and career development”を特集テーマにし、発表を受け付けます。

ほか、“History and systems”、“Curriculum and practice”、“International comparisons”、“Teacher training”、“Other subjects related to TVET”に関する発表も受け付けます。発表申し込みは8月17日(日)までです。みなさんの発表をお待ちしています。

また、2つのキーノートセッションでは、次の方に話をいただきます。ぜひ、ご参加ください。

- Keynote Speaker 1: 2025年11月22日 9時30分～
藤田晃之氏(筑波大学教授、日本キャリア教育学会会長)
- Keynote Speaker 2: 2025年11月23日 11時00分～
谷口雄二(職業能力開発総合大学校名誉教授、元AASVET会長)

大会の詳細については以下の大会Webページに掲載しております。

<https://ubonasm.net/AASVET2025/>

②技術教育研究会 第58回全国大会(つくば大会): 2025年8月2日(土)～4日(月)

技術教育研究会は、1960年から活動が続いている民間の教育研究会で、技術・職業教育をより豊かで実りある学びにすることを目指しています。今年度は茨城県つくば市にある「教職員支援機構」を会場に、第58回全国大会を開催することになりました。なお、8月2日の午後に行われる記念講演は、本学会の会長である坂口謙一先生に、「人間としての尊厳を保障する技術・職業教育を一学校内の普通教育を中心に」と題してご講演いただきます。

大会申し込み期限の7/25(金)が迫っており、本ニュースレターがそれまでに学会員の皆さまに届かない可能性もありますが(その際にご容赦ください)、オンライン参加が可能な部会もありますので、ぜひウェブページをチェックしてみてください。

⇒[大会案内へのリンク](#)